

中学生 特選

言葉が通じないとしても

南陵中学校一年 小迫田 蘭

言葉が通じなかったとしても、心は通じ合える。これは私が生きてきた十二年間で学んだ、大切なことだ。

私のいとこの家族は、ホストファミリーとして、これまでに数人留学生の受け入れをしていた。夏休みや冬休みなどの長期休業の時には、私もその留学生たちと過ごす機会があった。

一番はじめに来たのは、インドから来日した女の子だった。日本ではサヤという名前で呼ばれていたその子は、当時高校生。まだ小学一年生だった私は、とても大きく感じていた。サヤは日本語があまり話せないのに加え、私との歳の差は十歳だから会った時は、仲良くなるなんて想像もしていなかったと思う。

ある日、リビングで絵を描いていると、となりの部屋から音楽が聞こえてきた。日本で流行っている曲だ。私もよく聴いていたその曲をかけてい

るのは、サヤだった。私は、思いきってサヤに「この曲好きなの。」とたずねてみた。するとサヤは「こちない日本語で、「うん。大好き。」と答えてくれた。それから私とサヤは、一緒にその曲を何度も何度も聴いたり、歌ったりした。今でも、そのメロディーが聴こえてくるたびに、あの頃のサヤのことを思い出す。

小学四年生の冬休み、今度はキョウちゃんとうちちゃんという二人の女の子が来た。二人とも高校生で、それぞれタイとバングラデシュから来日したようだった。どんな子かあまり分からない不安な気持ちもあった。その時、サヤに話しかけてみたら仲良くなれたことを思い出した。またきつと仲良くなれると信じて話しかけてみると、キョウちゃんもエミちゃんも絵が好きなることを知った。私も絵が好きと伝えると、二人は「一緒に描こう。」と言ってペンをわたしてくれた。三人でこたつに入って思い思いの絵を描く。とても暖かく幸せな時間だ。その次の日にはキョウちゃんがタブレットとタッチペンを貸してくれた。そして、キョウちゃんとエミちゃんと二人がかりで、私に絵を描くアプリの使い方を教えてくれた。その時に二人が描いてくれた二つの絵を、私はずっと、鮮明に覚えている。

昔、外国から来た留学生の子と一緒に過ごした

経験があると、友達に話したことがある。その友達は、怖くないのかと私にたずねてきた。外国の人は怖い。そういう偏見が知らず知らずのうちに染み付いているからこそ、そんな質問をしてきたのだと思う。言葉が通じないから、文化が違うから、育った場所が遠く離れた地だから、分かり合えないと思っている人もいるかもしれない。けれども私は、そうではないと知っている。言葉が通じなくても、心は通じ合える。サヤやキョウちゃんやエミちゃんが教えてくれた。私の場合はその手段が「音楽」と「絵」だった。しかし、きっとそれは人の数だけあるだろう。相手のことを知ろうとすれば、心を通わせることができるということだ。私はこのことを、声を大にしてみんなに伝えたい。



僕の住んでいる地域には、伝統的な「まゆ玉飾り」という行事があります。元旦を中心とする正月を大正月と呼ぶのに対し、一月十五日を中心とする正月は小正月と呼ばれます。小正月の行事の一つに、まゆ玉があります。まゆ玉飾りは、コナラ・カシ・クワの木にお米の粉をお湯でこねて、丸やまゆ玉の形を作ってふかした団子を刺します。まゆ玉飾りを作り、食べるという行事を「どんど焼きの会」と言います。

僕は、六才の時に初めてまゆ玉・どんど焼きの会に参加しました。この行事は、毎年北野小学校区子ども会育成会と地域のじいばあ会の方たちが協力して開催してくれます。

次の年は、母が育成会の役員でした。僕はお手伝いする側になったのですが、まだ一年生だったので、子どもリーダーをしていた兄の後を付いて回るのがやっとでした。僕は、そんな兄に憧れました。その時の様子は、JCOMチャンネル・イイとこTVで取り上げられました。レポーターの●●●●さんが会場となった小手指まちづくりセンターに来て下さり、一緒にどんど焼きを体験してくれました。子どもを含めた九十四人の方

が参加してくれたので会場はとても賑わっていました。じいばあ会代表の●●●●さんがカイコの話をしてくれた時は、三年生の時に総合の授業で育てるカイコが楽しみになりました。兄やみんなと食べたお団子は弾力があって美味しく、この伝統的な行事がずっと続けば良いと思いました。次の年から新型コロナウイルスが流行し、まゆ玉・どんど焼きの会は中止となりました。

僕が六年生になった時、五年ぶりにどんど焼きが復活すると母から教えて貰いました。育成会役員は経験されている方がいなく、復活祭は手指のテラコヤ北野と言う子ども食堂でボランティア開催されるとの事でした。母にボランティアに誘われた時、僕はすぐに「やりたい」と答えました。

復活祭当日はじいばあ会の方も来て下さり、一緒にブルーシートを敷いたり、団子の粉を用意しました。団子の粉に少しずつお湯を加えながら混ぜる作業はかなり力が入りました。お団子を小さく丸める作業は参加してくれる子どもたちがやるので、僕が手伝うのは団子のタネを作る所まででした。団子の丸め方や大きさを参加者に教える時、「ねん土でお団子作った事ある。」や「すなで作った。」と教えてくれる子もいました。丸めた後は、大人のボランティアの方が団子をセイロでふ

かしてくれました。僕はふかした団子が乾かない様に濡れふきを被せ、参加者一人ひとりにクワの木で作った棒に団子を刺して渡しました。クワの木の先端はとがっているのですが、以前は大人の方しかやらなかったそうです。コンロで団子を焼いている時の楽しそうな様子を見てみると僕もうれしくなりました。焼いた団子には、しょう油や甘だれをかけて食べます。団子にできるおこげが香ばしいので、わざと焦がしてる人もいました。用意していたベンチが全て埋まるくらいの方が参加してくれ、最後のチームが終わった後に僕も団子を食べました。

ボランティア活動を通して色々な方と交流ができました。テラコヤ北野さんは今年の五月で一周年を迎えたそうです。アニバーサリーの子ども食堂祭りのボランティアは部活があり参加出来ませんが、また機会があれば参加したいです。



僕の弟は自閉症で、知的障害を持っています。

このことを題材として取り上げるか、とても迷いました。なぜならば僕自身が弟の障害をしつかり受け止めきれず、様々な葛藤があるからです。しかし文章化することで自分自身の今の気持ちを整理したいと思い、書く決心をしました。

弟は僕の五歳下で、現在支援学校に通っています。弟は小さい頃から発達に問題を抱えています。自分の思い通りにならないとパニックを起こして泣いたり、大声を出したりすることもありません。外出先では目を離すと一人でどこかに行ってしまうったり、車への注意も向かないため安全面にも配慮が必要です。支援学校が終わると放課後デイサービスに通所し、帰宅後は主に母が面倒をみています。僕はたまにお風呂に入れたり、外に出るときは手をつないであげたり、男子トイレに一緒に連れて行ったりしています。

普段両親は共働きですが、母は弟の生活に合わせて仕事をしています。僕は弟の面倒をたまに見る程度なので、何の不自由もなく勉強をしたり野球の練習をしたりと自分のしたいことをして暮らしています。しかし、いずれ母が年老いて弟の

面倒をみられなくなったら、僕が母の代わりをしなければならぬのかと不安になることがあります。困った行動は多々あっても、弟は僕にとってかけ甲斐のない存在で、生まれてからずっと可愛がってきました。兄として出来ることはなるべくやってやりたいという思いがあります。しかし僕自身、自分の将来のことすら分からない状態なのに、弟のことを考えると『これからどうしよう、どうやって弟の面倒をみればいいのか』と不安が押し寄せてくることがあります。そこで弟がどのような社会的支援を受けることが出来るのか、所沢市の福祉サービスについてインターネットや行政の資料などで調べてみようと思いました。

一つ目は相談支援です。市役所や障害児相談支援事業所で、福祉サービスなどの相談をすることが出来るそうです。弟は支援事業所の専門相談員と契約しているため、分からない制度やサービスもその方に質問する事が出来ると知り、一人で悩む必要はないと少し安心しました。二つ目は通所支援です。通所支援とは心身の発達に何らかの心配や障害のある子どもが、遊びや運動など小集団の活動を通して成長していけるよう支援してくれるサービスのことです。弟は放課後デイサービスを利用していますが、成長ペースに合った指導をしてくれるので、最低限のマナーや社会のルー

ルが身につくのではないかと思いました。その他にも障害者手帳を持っていると、県内発着のバスなどを利用する場合に運賃の割引があるそうです。このように所沢市では様々な支援があり、弟は現在も福祉に支えられながら生活しています。将来的には就労支援やグループホーム、障害年金などがあるようで、弟の成長を見守りながら、弟に合った環境や社会的サポートを探して行きたいと思いました。

僕は、弟に障害があるからという理由で将来が見えていない状況でした。しかしいろいろ調べていくうちに、障害があっても社会的サポートを利用することで幸せに生活していくことが出来るのではないかと思いました。また自分の将来の夢も、弟のことで妥協せずと考えていいのではないかと考えるようになりました。そのためには、まず僕自身が弟の特性をよく知り一番の理解者でいたいと思うし、専門家の力を借りながら弟に寄り添い続けていきたいと思いました。弟は、いわゆる『普通ではない子』ですが、普通でなくても幸せになる権利は平等であると強く信じています。

中学生 金賞

将来のために今できること

南陵中学校一年 林 泉希

「将来の夢は、決まっている？」

中学校に入学してすぐの五月、スクールカウンセラーの方との面談で聞かれた。将来の夢やどんな高校に進学したいかの質問に私は答えられなかった。中学一年生になったばかりで、もう将来や高校の話をするのだと驚いた。夢は明確に決まっていけないけれど、漠然と将来はしっかりと自立し、計画的に行動が出来る人になりたいとは思っている。でも、この面談をきっかけに将来について自分なりに考えてみようと思った。

私が考えるしっかりと自立をして計画的に行動が出来る人とは、仕事でもプライベートでも時間の管理が出来る人。目の前のことだけではなく、先々のことまで考えて、そのために準備が出来る人。そして、自分のことだけではなく、周りの人々と助け合って協力することが出来る、誰かが困ったときに手を差し出すことが出来る人。この人なら助けてくれそう、何とかしてくれそうと思っ

てもらえるようなそんな大人になりたいと思っている。そのために私が今できることは何だろうか。

私は今、クラブチームでバスケットをしている。チームの仲間と一緒に二年後のジュニアインターカップで優勝することを目標に日々の練習を頑張っている。そして、その試合で多くの得点を決め、チームの勝利に貢献できる選手になることが私の目標だ。目標達成までには、越えなければいけないハードルがたくさんあり、道のりは長い。今の私はまだまだ基礎だけではなく、シュートの決定力、瞬時の判断力すべてにおいて足りていない。でも、ひとつひとつのハードルを越えるために毎日繰り返し練習をし、強化していきたいと思っている。ドリブルの基礎を高め、シュートのバリエーションを増やし、瞬時に判断できるように力をつけ、小さなチャンスの時のための準備を大切にしようと思いつつ日々練習を頑張っている。正直、バスケットではうれしいことよりも悔しいことの方が多い。楽な練習はひとつもなく、苦しい練習の連続だ。それでもバスケットを続ける理由は、つらい練習を乗り越えて、少しでも試合に出ることが出来た時の喜び、自分らしいプレーが出来た時のうれしさを知っているからこそ続けられるのだ。バスケットを通して、目標に向けて継続する力

や困難な状況を乗り越えていく力をつけていると思う。

学校で学ぶ勉強も時間もそのひとつだと思っている。いろいろな判断をしなければいけない時、自分なりの判断が出来るためにも知識は大切であり、学校で学ぶことが将来の選択肢を増やすことにもつながるのだと思う。そして、学校で過ごす時間は、先生や友達とのコミュニケーションを通して、他人との関わり方や一緒に達成する喜び、協力することの大切さなどを学べる場所だと感じている。

明確な夢はまだ見えていないけれど、今の行動、考えひとつひとつが、将来につながるっていくのだと思う。そして、積み重ねていった先に将来の夢が見えてくると思うからこそ今できること、目の前のことを真剣に取り組んでいきたい。



助けることの大切さを感じた日

安松中学校二年 早坂 凱

私は、塾の夏期講習が終わり帰り道を一人歩いていました。気づけば日が暮れかけてあたりは少し薄暗くなっていました。疲れていたのので早く家に帰って休みたいと思っていたそのとき、突然、誰かに声をかけられました。「すいません、駅へ行きたいのですが、道を教えてもらえませんか？」驚いて振り向くと、白い杖を持った盲目の方が立っていました。私は少し戸惑ってしまいました。突然のことだったので、どうすればいいのか一瞬分からなかったのです。でも、目の前のその人は困っているようで、不安そうな表情をしています。私は思い切って、「駅まで一緒に歩きますよ」と声をかけました。その人は少しほっとしたように、「ありがとうございます」と小さく笑いました。そのとき、私の中にあつた戸惑いはすつと消えて、「助けてあげたい」という気持ちに変わっていききました。

駅までは5分ほどの距離でしたが、盲目の方と歩くのは初めてだったので、どう声をかければ安心してもらえるかを考えながら、一歩一歩ゆっくり歩きました。「段差がありますよ」「電柱があり

ますよ」と、なるべく分かりやすく説明しながら、慎重に道を案内しました。

やがて駅に着き、改札口の近くまで案内すると、その人は深々と頭を下げて、「本当にありがとうございます」とお礼を言ってくれました。その言葉を聞いたとき、私はなんだか心があたたかくなり、とても嬉しい気持ちになりました。ただ駅まで一緒に歩いただけかもしれないですが、その人の助けになれたことが、私にとってはとても大きな意味を持っていました。

それから私は、「また困っている人を見かけたら、今度も迷わず手を差し伸べたい」と強く思うようになりました。

誰かが困っているとき、自分にできることを少しでもするだけで、その人の不安を減らしたり、笑顔を取り戻してあげられることがあるのだと知ったからです。

この体験を通して、私は人を助けることの大切さと、それによって自分自身も幸せな気持ちになれるということを学びました。

これからも、人の気持ちに寄り添える優しい心を持ち続けていきたいと思えます。



森を守るボランティアに参加しませんか

所沢中学校三年 井瀧 莉子

私は、今年森を守るボランティアに参加しました。きっかけは、昨年の夏休みの課題で自然保護について調べる機会があったからです。そこで様々な形のボランティアがあることを知りました。私はボランティアに参加しようと公益財団法人埼玉県生態保護協会の、ホームページを見て、一つの活動に興味を持ちました。そのボランティアの内容は、公園の野草を豊かにする活動でした。私がそのボランティアに申し込みをし現地へ行ってみると、公園といっても私は想像していた遊具が沢山あるような公園ではなく、森であるということを知ってびっくりしました。作業した場所は、普段一般人は入れず許可を取って入ることのできる場所でした。私はボランティアの方々の指示を受け、笹を刈り取ったり、切られた大木の枝を落として運びやすくしたりしました。一見、木を切ると聞くと自然破壊につながるように感じられるかもしれませんが、しかし、すべてがそうではないことを知りました。ボランティアの方々の話によると、森を守るために木を切らないといけないこともあるそうです。

「森が荒れている」この言葉を皆さんは聞いた

ことはありますか。私は聞いたことはありませんが、全く意味を理解できていませんでした。森が手入れをされていないと、常緑樹が茂り下の植物まで太陽の光が届かず、草花が育たなくなってしまう、暗い森となり生態系が崩れてしまうことを教えてもらいました。昔は薪として利用していたため適度に木を切り続けることができていましたが、現在では電気やガスの普及により、薪を使わなくなったこともあり、常緑樹を計画的に間伐する必要のある事も知りました。

また、森は暗すぎて明るすぎてもだめで、明るすぎると「ルリビタキ」などの鳥が住みづらくなってしまうことや、木を切る際には鳥や動物たちを驚ろかせないように小さな音の充電式チェーンソーを使い、小さな枝を切るとき手動のノコギリを使ったり動物のことを考えて慎重に活動していることも知りました。小さな植物にも配慮をしていました。例えば、笹は根から取るのではなく大きくなりすぎないように上の方だけを取るように指示されていました。集中して作業をしていると時間はあっという間でした。作業をしている間にボランティアの方々には色々な植物のこなどを教えてもらいました。その中でも小さな実をつける「ウグイスカグラ」は初めて見た植物でした。その方の話によるとウグイスがその植物

のまわりで飛ぶ様子が神楽を舞っているようにだと言われたことがその由来だそうです。最後にボランティアの方々から「またいらっしやい」と言ってくれました。

私はこのボランティアに参加して、森を守るといのはどんなに大切で大変なものかを実際に体験し、具体的に知ることができました。森を守るボランティアときくとハードルが高いと思いがちですが、皆さんが考えているよりは高くないと思います。私が参加したボランティアでは一日だけでも参加できずごく丁寧に教えてもらいました。

みなさんも、森を守るボランティア参加してみませんか。



これからの人生

南陵中学校三年 尾形 美和

私には将来の夢があります。でもその将来の夢は職業ではありません。私の将来の夢は「目の前にいる人にとって、意味のあるような行動をとれる人になる。」ということです。

中学三年生になった今、進路のことや将来の夢について考える機会がとて多くなりました。私は将来なになりたいんだろう。と考えることがよくあります。将来の夢について考え始めたとき、自分のなりたい職業について必死で考えました。ただ、どれだけ考えてもこれといったなりたい職業はできませんでした。でもある出来事をきっかけに私は思いました。将来の夢は職業じゃなくてもいいのではないかな。

少し前に個人的にシヨックだな。と思うことがありました。その日は木曜日だったので次の日も学校に行きました。私だけではないと思いますがいやなことがあるとそれは全然頭からはなれてくれません。なので、その日の休み時間はいつものようにみんなとお話しをするけれどあまりみんなの話は頭に入ってきませんでした。昼休みになると、私の仲の良い友だちが話しかけてくれました。その友だちは、私の好きなことについてい

っぱい話してくれました。私はこのとき、いやなことが頭から少し抜けて気持ちが悪くなりませんでした。今思うとこの友だちはあるとき私に少し元気がないことに気づいてあえて私の好きなことについていっぱい話してくれたんじゃないかなと思います。私は気持ちを楽にしてくれた友だちにありがどうの気持ちでいっぱいになり、それと同時に私もこのように少しでも目の前の人にとって意味のある行動をとれるような人になりたい。と思いました。そのとき、これが将来の夢なのではないか。と私は思いました。

以上のことから私はどんな職業に就くかよりも、どんな人間になりたいか。ということを考えています。なぜなら、職業の種類は数あるけど、やっぱりその一番根っこにあるのは自分がどんな人間でありたいかということだと思うからです。私は中学校一年生から今までの部活と部活の副部長、委員会、行事での仕事、友だちとの関わり方、そして、元気がない私を助けてくれた友だちなど、いろいろな出来事のおかげでこの大切なことに気が付くことができました。将来の夢といわれると自然と職業のことを考えがちですが、なりたい職業だけが将来の夢ではなく、どんな人になりたいかも将来の夢なのではないかと今、私は思っています。

この中学校生活の中で学んだことを活かして高校に入ったら、周りをよく見て大きな荷物を持つている人がいたら半分私が運ぶ、プリントをばらまいてしまった人がいたらだれよりも率先して助けるなどの行動、大学に入ったら地域のボランティアなどにも参加して、少しでも元気がない人がいたら話しかけて相手の話しやすいように相手の好きなこと、推しなどの話をして、相手の気持ちを楽にさせたいです。そして、社会人になったらさらにレベルアップさせて仕事という世界観の中で目の前の人にとって意味のある行動をとれるような人になりたいです。



人生を彩る「好き」でつながる

南陵中学校三年 田所 咲空

私はある日、渋谷のホールに出かけた。理由は短歌の大会を観覧するためだ。

短歌は国語の授業で学んだことがある。だから、五七五七七の三十一音で作られていることや、短い言葉の中に作者の気持ち、情景などが込められていることは知っていた。授業ではなんとなく作品の面白さを感じたけれど、短歌の大会に出かけようとは思わなかった。

今回、私がこの大会に行くことにしたのは、短歌にとっても興味がある、からではない。一番の理由は、この大会に招待された人、私の大好きな祖母に会いたかったからだ。そして、もう一つは、授業で学習したときに、教科書に載っていた歌を詠んだ方が数名、出演されると知ったからだ。倭万智さんなど、教科書に載っている方にお会いできるなんて初めてだ。

でも正直、短歌の大会にたくさんの方が集まるのだろうか、祖父母のような高齢の方々ばかりなのではないだろうかと思っていた。途中で飽きてしまうのではないかとという不安もあった。しかし、会場に行ってみると、私の予想とは全く違う景色が広がっていた。高齢の方々やはり多かったが、

老若男女問わず多くの人が来ていて、大きなホールは人でいっぱいになった。

大会では、祖母のような短歌を楽しむ全国の一般の方々から、選ばれた方々の歌が紹介され、皆さんなど、著名な歌人の選者の方々が歌から読み取った情景や感想を述べていた。同じ歌でも、選者の方によって全く違う解釈や考察をしたり、共感したり、人それぞれの感性の違いに、面白さを感じた。短歌の世界は詠み手だけでなく、受け手にとっても自由で、表現することで歌の世界がさらに広がるのだと感じた。意味に正解はなく、想像を広げて楽しめるのだと気づいた。短歌から感じとった意見を交換することも、面白さの一つであるように思えた。

祖母に会うために観覧することになった短歌の大会だが、私はいつの間にか、初めて会った人の、初めて聞いた歌の世界に惹き込まれていった。中でも、大地震で被災した人の歌は、特に心に残った。震災での状況だけでなく、恐怖や不安の気持ち、不自由になった毎日の本音が綴られていた。テレビで観た震災の映像が、歌を通して今まで以上に身近な出来事を感じられた。そして、それと同時に短歌の世界の奥深さや面白さに気づくことができた。大会の時間は、あつという間に過ぎていった。

短歌の内容は、特別な出来事でも、普段のちょっとした出来事でもいい。自分が考えていること、気づいたこと、見つけたことでもいいし、誰かに伝えたいこと、届けたい想いでもいい。限られた文字数で、単純だからこそ、言葉遊びや表現の工夫が詠む人個性となり表される。老若男女、誰でもどこでも、正解や得点もなく、自分の言葉で、日本語の世界を楽しむことができる。

夏草と 思ふ存分 戦ひぬ

夕闇迫れば 五分の引き分け

これが選ばれた祖母の短歌。家の草取りについての歌だそう。草取りが歌になるなんて。祖母が話してくれたこの歌の解説も草取りの話もとても楽しそう。私も自然と楽しい気持ちになった。また、普段は譲ってばかりの祖母だからこそ、祖母の新しい一面を知れ、うれしい気持ちになった。なんだか自分でも短歌を作りたくなってきた。翌日、私も祖母のような歌を作りたいと思い、短歌をひとつ作ってみることにした。五や七を指を折り数えながら、試行錯誤して完成を目指した。でもいざ作るとなると、ちよどよい言葉が見つからない。歌をひとつ作るのに、頭の中にたくさん言葉や自分に合う言葉を探しながら、その難しさを痛感した。

私は、まだまだ自分の言葉の世界は狭いという

ことに気づかされた。そして改めて祖母の短歌が光って見えた。祖母が短歌のことを話す時間は、祖母の心が彩られているように感じた。そんな祖母を見て、私自身も祖母のように自分の好きを見つけ、心から楽しみたいと思った。

先日、祖母から一本の電話があった。その内容は、新しい歌ができたというものだった。それも、数日前に観に来てくれた、私の合唱団のコンクールについての歌だそう。私の夏の思い出が祖母の歌となり、祖母との思い出にもなった。短歌という、祖母と一緒に楽しめ、つながれる話題が一つ増えたこともうれしい。次に祖母に会えたときは、祖母からこの新しい短歌を教えてもらおう。短歌の考え方も教えてもらおう。そして私の感想も伝えよう。祖母と短歌の話をするのが、今からとても楽しみだ。



中学生 銀賞

私が今地球にできること

中央中学校一年 市川 美結

みなさんは地球の悲鳴を聞いたことがありませんか。私は地球が「助けて」と叫んでいるように感じます。近年、地球がどんどんおかしくなってきたことをニュースで見聞きすることが多くあります。地球温暖化によって、夏は猛暑日やゲリラ豪雨、冬は一度に大量の雪が降る「ドカ雪」が増加するなど、天候による災害がとても多いです。こういった地球の変化を身近で感じる出来事がありました。

私の家は農家をしています。様々な種類の野菜を作っています。なかでもトマトはハウス二棟を使ってたくさん栽培しています。採れたてのトマトは、甘さの中にも酸味があり、みずみずしく私の大好物です。毎年夏休みには、朝の涼しいうちにハウスに行って真っ赤なトマトを採って食べるのが楽しみでした。しかし、この二・三年様子がおかしいのです。八月のお盆ごろまで採れていたトマトが、一ヶ月も早く夏休み前に収穫がで

きなくなってしまう。私はその理由を父に尋ねました。

「トマトは水分が多い野菜だから、気温が高すぎるとトマト自体が熱くなって駄目になってしまいうんだよ。」

と教えてくれました。そして、収穫したが商品にはならず捨ててしまおうとトマトを見せてくれました。ところどころブヨブヨになってしまったトマトに触れてみると

「熱い」

私は驚いて思わず声を上げてしまいました。ハウスで収穫したばかりのトマトは、まるで味噌汁のお椀のような熱さでした。気候に大きな影響を受ける野菜づくりについて父は、

「これ以上暑くなって、四季が無いような状態が続くと、何を栽培するか見直さなくてはいけなくなるかも。」

と心配そうに話していました。そんな父の表情を見て、私は不安な気持ちでいっぱいになりました。この出来事で地球温暖化をより身近なものと感じ、環境問題に関心を持つきっかけとなりました。

小学校で習ったSDGs、国連が決めた二〇三〇年までに世界の人々が達成しなければならぬ十七の目標の中にも気候変動への目標が含まれています。地球温暖化に影響を及ぼす温室効果

ガスの濃度がこのまま上昇を続けると、二一〇〇年には地球の平均気温が最大四・八度上昇すると予想されています。このまま地球温暖化が進めば、農作物が採れなくなり飢餓が増えるかもしれません。この危機的状況で中学生である私に何が出来るだろうと考えると、個人では出来ることが限られていると思います。しかし、地球に暮らす当事者として「自分に出来ることはないか」と探し続けることは大事だと思います。例えばエアコンの温度を無理のない程度で上げることや移動には自転車を使うことなど、普段の生活を見直すようなやさしいな行動で未来は変わると信じて私は自分に出来ることをやろうと思います。

大きな流れを変えるのは、大変なエネルギーが必要だけれど、まずは「自分さえ良ければ」「今さえ良ければ」などの考え方をやめ自分に出来ること、出来ることからやってみようと思います。そして、出来ることの範囲を少しずつ広げていくことが私の今の目標です。父が丹精を込めて作った野菜がこれからも多くの人に食べてもらえる未来があることを願って。



希望という名のバトンをつなぐ

南陵中学校一年 千葉 由莉子

今、私たちが生きているこの世界は、多くの課題を抱えている。自然災害、戦争、格差環境問題、いじめ、SNSでの誹謗中傷。ニュースや日常の中には、心がざわつくような出来事があふれている。「このまま未来は大丈夫なのか」と。でも、だからこそ私は希望という言葉を大切にしたいと思っている。希望とはただ夢を見ることではない。それはつらくても前を向く力であり、あきらめずに進もうとする心の強さだ。そして希望は人から人へとつながっていくものである。まるで、バトンのように。過去を生きた人々から受け取り今を生きる私たちが握りしめ、そして未来の誰かに手渡していく。そのつながりこそが、社会を少しずつ変え、前進させてきたのだと思う。私たちの国の歴史をふり返っても多くの困難の中で希望がつながれてきた。戦争で何もかも失った時代。震災で街が崩れた時。経済が苦しくなった時。そんな時代にも人々はあきらめず、未来のために立ち上がった。家族や仲間を思い、助け合いながら生きてきた。その姿に私は尊敬の気持ちを抱くと同時に、「自分もバトンを受け取った一人なんだ」と感じる。今の時代を生きる私たち青少年は、たし

かにまだ未熟かもしれない。けれど、未来を変える力を持つている。それは、特別な才能や大きな行動ではなく、小さな思いやりや一步を積み重ねることだと思う。たとえば、悩んでいる友達に声をかけること。誰かの意見を否定せずに聞くこと。自分と違う考え方や生き方を受け入れようとする。そういった日々の選択が、まわりの人の心を明るくし、希望を生み出すことにつながる。もちろん、私自身も毎日迷う。将来のこと、進路のこと、自分の存在価値について自信がなくなつて立ち止まることもある。でも、そんなとき私はこれまで支えてくれた人たちの言葉を思い出す。家族、先生、友達の励ましや笑顔が、私の中に希望を与えてくれる。それと同じように、私も誰かにとつての希望になれたらうれしい。希望は見えない。でも確かに心の中にある。そして、それは一人で持つものではない。みんなで分け合い、つなぎ合うからこそ、大きな力になるのだと思う。だから私は、目の前の人を大切にし、小さくても自分にできることを探していきたい。未来はまだ見えない。でも、だからこそ私たちは選べる。どんな未来にしたいか、どう生きたいか。正解のない世界だからこそ、自分の意思で歩むことが大切だと思う。そしてその一步が、やがて次の誰かへのバトンになる。希望という名のバトンは

過去から現在へ、そして未来へと、静かに、でも確かに渡され続けている。今、私の手にあるこのバトンを、私はしっかりと握りしめて、次の誰かへ、自信をもってつなげたい。たとえ小さな力でも、その思いがきつと未来をつくっていくと信じて。希望は特別な誰かだけが持つものではない。私たち一人ひとりの中にあり、行動によって育まれていく物だ。だから私はどんなに小さなことでも、自分にできることを大切にしていきたい。受け取ったバトンを信念と誇りをもって、次の時代につなげていくために。



私の将来の夢は陸上選手になることだ。私は走ることが好きで幼稚園のころ毎朝友達と走っていた。小学生の高学年になり、中学校に入ったら絶対陸上部に入ると決めていた。

陸上部に入り、毎日部活を楽しみにしながら生活をしてきた。思っていたより練習がきつく大変だった。学校でタイムをはかった時記録会で走った時、タイムがなかなかよくならなくライバルに負けてしまうことがほとんどだった。くやしくて泣きそうになったこともある。でも、そのくやしさがあつたから私は「もっと速くなりたい。勝りたい。」そう思い、毎日の練習をより全力で集中してやるようになった。前よりもスタートが上手になった時、記録会でタイムがどんどんよくなっていくのがうれしかった。そして記録会で走っていた動画を見返すと仲間が大きい声で名前を呼んで「がんばれ!」「ファイト!」など応援してくれてとてもうれしかった。日々とても暑いなかでの練習がきつくてあきらめようとした時「あとちょっと!がんばろう!」と仲間が声をかけてくれてあきらめずにやりきることができた。ゴールした時は足がふらふらだったけれど「やりきった」と

いう気持ちで胸がいっぱいになった。夏休みは、ほとんど毎日のように部活があった。朝早く学校についたとしてもたおれそうなくらいの暑さだった。私は速い人が選ばれて学校を代表するリレーにあこがれていた。私も選ばれたチームのみなどバトンをつなげたい。そう強く思った。そしてメンバーを決める選考会があった。緊張して自分の心臓の音が聞こえた。いよいよメンバー発表の日が来た。私たちは先生の前に立った。「○○さん」「○○さん」そして次に私の名前が呼ばれた。いっしゅん頭がまっしろになった。「うれしい!」という気持ちで胸がいっぱいに広がった。だけども一歩に走ってくれていた最高のライバルの名前が最後まで呼ばれなかった。

発表が終わったあとその友達の前へ一番に走って向かった。友達は涙をこらえながら少しふるえた声で私に「がんばってね。」と言ってくれた。そのしゅんかん、私の目からも涙があふれた。友達を思わず強くだきしめた。うれしいのにつらい、よるこびと悲しみがまざったような複雑な気持ちで胸がいっぱいになった。

それから私はリレーのメンバーと一緒にアードバイスをしあつて必死に練習した。ところが数週間後の練習で先生が言った。「リレーのメンバーは、一から考え直おす。」せっかくがんばってき

たのに。「このままだと私じゃなくてあの子が選ばれるかもしれない」頭のなかにそんな考えがよぎった。考えれば考えるほど不安が大きくなった。でも、不安で立ち止まっていても何も変わらない。これまで積み重ねてきた練習を思い出すと「あきらめたくない」という気持ちがあわいてきた。選ばれるかもしれない。選ばれないかもしれない。今できることを集中してやり、自分の力を信じる。ゴールまで全力で駆け抜ける。どんなにつらくても、私は陸上が好きだ。



今があるのは

南陵中学校一年 吉野 未桜

昭和二十年、八月六日午前八時十五分に広島に原子爆弾が落とされた。それに続き、三日後の八月九日午前十一時二分に長崎に原子爆弾が落とされた。そして、六年後の昭和二十六年九月八日にサンフランシスコ平和条約が調印され、数ヶ月後の昭和二十七年四月二十八日に発効した。これによって、私達日本人は戦争も無く、平和に過ごしている。

私は学校で戦争教材を続んだ。内容はとても残酷であり、しかもときどき配給が来ても、ミルクが一缶だけというあまりにも残酷な事だった。私達は毎日三食、みそ汁や、パン、お米、サラダ等といったバランスの良い食事ができている。戦争の頃と、こんなにも食べ物の量が違う事はとてもおどろいた。また、戦争が起こっている中、自ら食料を取りに、少し遠い場所まで行かなければならない。もしかすると、それを取りに遠くまで向かっていると中に死ぬかもしれないと考えると、私が普段何とも思わずに食べてきた食べ物に、とてもありがたみを感じた。

数年前、私は公民館に行った。すると、モノクロのたくさんの人々の写真がかべに貼りつけて

あった。その写真に私は目がいき、近くでじっと見てみると、その人々は皆、けがをしていた。中には、顔のほとんどが焼けており、どうしたらそうなるってしまったのか、分からないほどに酷く、可愛そうな姿であった事は、今でも覚えているほどだった。その人々が大きなけがを負った理由は、あの、原子爆弾だった。私は始めて見た原子爆弾のけがに、おそろしさを覚えた。それと同時に、戦争とは、私が思っている以上に怖いものだと思った。

この事を私は思い出し、これを機に私は母に、曾祖母と曾祖父が戦争でどのような体験をしたのか、限りある情報を聞いた。私はたった少しの情報を知りただけで、鳥肌がたつほどに怖く、とても想像できた。しかし、想像したくないほどに苦しく、聞いているだけでも辛かった、それを逆手に取ると、戦争の被害に遭った人達の方が、私よりも、よっぽど辛く、怖かったのだろうと今思う。

防災の日として、給食に缶に入ったパンが出てきた。私はその時、ついに来たか、と身構えるほどだった。昨年、私は始めて防災の日として、非常食のおかゆを食べた。すると、思っている以上にとても不味かった。この経験は始めてだったので、とてもおどろいた。だが、今の私にとっては、

良い経験だったと思う。なぜなら、戦争が現在、起こらないのだから。災害が起こったとしても、たったの一日から三日といった所だろう。それでも大変なくらいだ。しかし、戦争が起きてしまつたら、どうなるだろう。短くても、数ヶ月、長くても、一年かかる事だつてあるに違いない。戦争が起きては、皆最初は非常食を食べるだろう。だが、それに慣れていなければ、一週間食べ続ける事だつて、到底無理だろう。

私達は毎日美味しいものを食べ、楽しく遊び、寝るといふ幸せな生活を送っているけれど、どこか、この世界で戦争をしている国があり、避難をして、苦痛な生活を送っている人がいる。同じ地球なのに、全く違う生活を送っている人がいる。私達は、昔の人がいたからこそ、今この日常を送っている事に心から感謝して、過ごしていく事が、大切だと思った。だからこそ、私達は小さな事にも感謝することがもっと必要なのではないかと考えた。



私は去年に引き続き、今年の夏休みにもサマー
スクールボランティアに参加することが出来ま
した。

サマースクールとは栃木県塩谷町にある、廃校
になった『星降る学校くまの木』という自然豊か
な場所で行なわれる活動です。

一週間親元から離れる五年生、六年生の子供達
と私は中学二年生リーダーとしてその子供達
が楽しく安全に過ごせるようにサポートをするの
が中学生リーダーとしての役目です。

大自然の中で時間割りのない学校生活は、みん
なで協力し合い仲間との絆を深める、とても大切
な時間を過ごすことが出来ました。

私は去年の自分と比べて、飛躍的に行動力が上
がったことが三つあります。

一つ目は、先を読むことです。去年の私は、中
学生リーダーの仕事が全て初めてで、配膳では何
人分をどのくらいの配分で作ってあげばいいの
かや、種類ごとの置き場所など何も分からず、先
輩のリーダー達が動いてから動くのが当たり前
のようになっていました。今年ですが、今年の前
は中学生リーダーの仕事をお願いしたい理解できて

いて、どのくらいの配分で配膳したら良いのかや、
次に何をしたら時間を短縮出来るのかなどすぐ
に考え、行動出来た事で、約百二十人分を五日目
までは四十分ほど時間がかかっていましたが、七
日目の最終日には十五分で配膳が終わり、リーダ
ーを驚かすことが出来ました。仕事内容を理解し
て、先を読んで行動することでこんなにも仕事が
早く終わることが出来るんだなと思いました。リ
ーダーにも「もう終わったの！早いね！」とほめ
てもらい、とても嬉しく仕事へのやる気が更に上
がりました。

二つ目は、初対面の子と話すことです。去年の
私は初対面の子と話すのが苦手で、なかなか自分
から話しかける事が出来ず、リーダーにアドバイ
スをされてやっと話せるようになりましたが、今
年は一日目からバスの席で隣の子や班のメンバ
ーの子や違う班の子達など男女関係なく自分か
ら積極的に話せるようになりました。去年までは
話を盛り上げたり、冗談を言い合ったりする事も
出来ませんでした。今では周りの人も巻き込ん
で話を盛り上げたり、冗談を言い合ったりと笑
いながら話すことが出来るようになりました。サ
マースクールのおかげでより人と話すことの楽
しさもわかり、話すことが好きになりました。

三つ目は、声です。去年の私は精一杯声を出し

てもか細い声で、キャンプファイヤーや肝試しや
宴会など盛り上がっている所ではどんなに声を
出してもかき消されてしまいました。今年の特
にキャンプファイヤーで盛り上げる時に周りの
声にかき消されず、自分の声がしっかり届いて、
みんなが動いてくれました。キャンプファイヤー
終わりには大人リーダーの方に、「本当に成長し
たね。去年はすごい細かい声で話していたから心
配だったけど、今年はずいぶん声が出ていてよく
聞こえたよ。」と言われ、去年の自分と変わったん
だと感じ、とても嬉しかったです。

これからの日常生活の中でも、必ずサマースク
ールで経験できた事は生活に繋がるので、成長し
たことを活用し、これからの生活をより良いもの
にしていきます。

今回は高校生リーダーとしても、新たな仕事に
挑戦していきたいなと思っています。

私にとってのサマースクールはまだまだ未来
の自分へと繋げていきたいかけがえのない活動
です。



私はこの夏、地域ジュニアリーダー養成講座に参加しました。最初に案内を聞いたとき、「リーダー」という言葉に大きなプレッシャーを感じ、自分に務まるのだろうかと不安でした。これまで、たくさんさんのボランティアに参加したわけでもないし、地域のイベントや活動は大人が計画するものだと思うっていたからです。

しかし、実際に講座に参加してみると、中学生でも地域のために考え、行動できるのだと気づくことができました。講座で特に印象に残っているのは自分で地域のイベントの企画書をつくり、グループ内で発表をした体験です。

私は、「高齢者向けのスマホ・PC講座」を提案しました。最近ではインターネットを使う機会が増えていますが、高齢者の中にはスマホやパソコンの扱いに不安を感じている方も多いのではないかと考えたからです。

そこで、若い世代である私たちが先生となり、操作方法を分かりやすく教えることで、高齢者の方々が安心して使えるようにしたいと思いました。また、この交流を通じて世代をこえて仲良くなれるのではないかと願いも込めました。

企画書を作る際は、自分の考えを整理することが大切でした。例えば、どのように伝えれば分かりやすいか、どう工夫すれば多くの人が参加してくれるか、など細かい点まで考えました。

発表の時は、少し緊張しましたが、順序を追って丁寧に説明すると、同じグループになった子や大人の方々がうなずきながら聞いてくれました。「とても良いアイデアだね」と言ってもらえた時、自分の考えでも地域の役に立てるのかもしれないと実感しました。

また、グループで各自発表した後に、どうすればより良くなるのか、このイベントを開くことでどんなことが大事になるかなど互いにアドバイスをし合うことができました。

この体験を通して、私はいくつかのことに気づきました。

まず、イベントを考えるのは大人だけではなく、中学生でもできるということです。企画書をつくり、発表する過程は、自分自信の力でやり遂げる経験になりました。

また、ジュニアリーダーとは前に立って指示を出すだけでなく、仲間と協力しながら役割を果たす人だということです。リーダーといっても一人でなにからなまでにやるわけではなく、大人や仲間たちを協力することが大切だと気がつきまし

た。

講座に参加する前は、自分には地域のことはあまり関係がないと思っていました。

しかし、今回の講座に参加して、地域の活動に参加することは、大人に全て任せられるのではなく、中学生である自分にもできることがあると実感しました。自分が地域の一員であることを理解・自覚をして、今後は積極的に学校や地域で活動していきたいです。

今回の講座で得た経験は、私にとって大きな自信となりました。中学生でも地域の力になれることを講座で実感することができたからです。自分が考えた企画を形にして発表し、大人や仲間にも認められたことは、忘れられない経験です。もう私も「ジュニアリーダー」ということを自覚し、地域の活動にも積極的に参加したりして、地域の一員として役に立てる人間になりたいと思います。



今年の夏は異常なほど暑い。部活動を引退し、受験生ということもあって、夏休み中は極力外出せず、クーラーの効いた部屋で宿題や勉強をして過ごした。

そろそろ八月も終わりだというのに、連日のように暑すぎる日が続いている。埼玉県は今日も三十七度。地域によっては四十度を起している。熱中症警戒アラートが発令し、テレビでは災害級猛暑と伝えていた。去年の夏はここまで暑くなかったのに、ほんの数分外にいるだけで汗だくになり、照りつける紫外線が強烈で肌がジリジリと焼ける感じがする。このままでは、いつか地球が爆発するのではと心配になるほどだ。

気象用語で「猛暑日」とは一日の最高気温が三十五度以上の日を言う。また、公式用語ではないが、一日の最高気温が四十度以上の日を「酷暑日」として、猛烈な暑さに対し、注意を促すためにマスクなどで使用されている。一般的には三十五度を超えると私たち人間にとって危険な暑さと言え、熱中症のリスクや体調不良から、命の危険を感じるほどになる。

猛暑が発生する原因には、自然の変動や人為的

起因によるものがある。一九九〇年代以降、猛暑の増加は人間の活動によって引き起こされた地球温暖化やヒートアイランド現象によって起きていると考えられている。それまで珍しい現象と考えられていた猛暑は、いまでは日常的な現象となった。

また、社会、経済、環境など、多方面に悪影響を及ぼし、人間の健康被害や自然災害などを引き起こす。もはや自然現象ではなく、「猛暑」災害」と言っても過言ではないのだ。

日本は四季があり、美しい自然を持つ一方、地形・地質・気象等の特性により、災害に対しては弱く、厳しい自然条件下にある。そこに猛暑という災害が加わったことで、さらなる脅威にさらされている。

世界でも気候変動による干ばつや大雨による被害や熱波などの異常気象が起き、甚大な被害をもたらしている。

少し前まで地球温暖化といえば、北極の氷が溶けて、シロクマの住む場所が減っているという、遠い場所で起きている事のように思っていた。しかし、どうだろう。今年のような異常な暑さを体験し、さすがに他人事ではないと感じた。これほどまでに身近に迫っている問題だったとは驚きと同時に、ショックを受けた。

異常気候が普通になった時代に突入し、このまま無関心であれば、いずれ大変なことになるだろう。そのうえ毎年気温が上昇し続けたら、地球は耐えられるのだろうか。

猛暑が常態化しつつある中で、異常な暑さを、今年も暑いと受け流しては、手遅れになってしまう。一過性の問題ではなく、私たち人間の日常を根本から揺るがしかねない問題だと思う。命を守るための適応策と、地球の未来を守るための緩和策、その両方を考えるきっかけになってほしいと願う。

これから先、環境問題にどう向き合えばよいか、私たち一人一人が自分の事として関心をもち、行動を起こす必要に迫られている。この異常な暑さを「地球の悲鳴」だと気付くことが大事なのだ。

